



撮影：山田新治郎（表紙、並びに当ページ）



三菱一号館

東京都千代田区

十九世紀と二十一世紀が交差する空間がある。今は美術館として賑わう東京・丸の内の三菱一号館である。一八九四（明治二十七年）、英国人建築家のジョサイア・コンドルによって設計されたオフィスビルだ。一九六八年に解体された後、二〇〇九年に可能な限り忠実に復元された。十九世紀末から次々に赤煉瓦造りの建物並び、東京・丸の内界隈は「二丁倫敦（ロンドン）」と呼ばれ、西洋の雰囲気満ちあふれていた。三菱一号館は近代オフィスの先駆けとしてその中心にあった。当時の同館内の喧騒に想いを馳せてみる。階段を駆け上り、細い廊下を足早に抜けると、その先に十九世紀、二十世紀の光が差し込んでいたに違いない。

煉瓦造地下一階・地上三階建てで、英国ヴィクトリア時代後期に流行したクイーン・アン様式を採用した。竣工当時、館内は三菱合資会社が入居していたほか、階段でつながった棟割長屋の部分が貸事務所となっていた。復元は、三菱地所の丸の内再開発計画の一環。意匠や部材だけではなく、製造方法や建築技術まで可能な限り忠実に再現されている。構造は、「帯鉄」を使うなど建設当時と同じ「耐震煉瓦造」。加えて基礎に免震構造を取り入れた。

美しさが際立つ外壁の煉瓦は、腕よりの煉瓦職人を選抜して一日のべ一〇〇人により積み上げた。ジョサイア・コンドルの像が置かれた鉄骨階段は、洗練された装飾が施され、蹴上げ部分に透かしを入れたことで、自然光が階段室の隅々にまであふれる。ミュージアムカフェ、ショップ、歴史資料室を併設。美術コレクションは建物と同時代にシンクロ、十九世紀末西洋美術であるトゥールーズ・ロートレックの作品などを収蔵している。



かつて銀行営業室だった2階層吹き抜けの大空間。現在は巨大な柱、漆喰の壁などをそのまま復元して、「Café 1894」として飲食を提供している。当時の銀行窓口もカフェの内装に取り入れ、その面影を残しながら見事な融合を図っている。重厚でクラシックな雰囲気から、カフェの空間そのものが、三菱一号館の歴史を物語る「資料」となっている